

風土記の丘の花だより₂₀

今、そしてこれから見られる植物(1月4日)

新年あけましておめでとうございます。今年も紀伊風土記の丘の植物を紹介してまいりますので、よろしくお願ひします。ではさっそく、春を待つ植物をいくつか紹介します。春になり花を咲かせるまで地面に張り付いて、じっと絶えている状態を「ロゼット」と言ひます。例へばタンポポなどがよく知られていひます。ほかにもちチコグサや、ウラジロチチコグサ、オオアレチノギク、ハルノノゲシなどのロゼットが散歩の途中でたくさん見つけられます。



左から、タンポポ ウラジロチチコグサ チチコグサのロゼットです。

次に葉や花になるために北風にじっと絶えている冬芽を紹介ひします。

万葉植物園のシャクナゲのつぼみが大きく膨らんでいひます。花木園のコブシのつぼみも綿毛でおおわれて暖かそうです。タブノキは前の19号でも紹介ひしましたが、ピンク色から紅色になってきていひます。左からシャクナゲ コブシ タブノキです。



最後に実や種です。

万葉植物園のオケラ (左) がカラカラになって風に揺れていひます。中にたくさんの種が入っていひます。同じくコウヤボウキ (中) は綿毛になりました。ヤブコウジ (右) の真っ赤な実



も北風の中じっと春を待っていひます。まだまだたくさんのがんばっている植物を探してひてください。 松下

風土記の丘の花だより²¹

今、そしてこれから見られる植物(1月11日)

相変わらず不順な天気が続いています。健康維持のためにも、風土記の丘を元気に歩いてくださいね。



園内のあちらこちらでスイセンの花が咲き始めました。スイセンはヒガンバナ科の植物で、庭にもよく植えられるなじみの深い早春の花です。学名は *Narcissus*。読んでみるとギリシャ神話の「ナルシス」のことと分かります。ナルシスは水に映ったあまりにも美しい自分の姿に恋をして、その場を離れず、ついにはスイセンに姿を変えたという話が残っています。それほどきれいで香しい花だということですね。



旧小早川家住宅の庭では、ロウバイの花が甘い香りを漂わせています。ロウバイは「蠟梅」と書きますが、梅の仲間ではありません。ロウバイ科の植物です。花びらがまるで蠟細工のように見えるので名付けられました。きれいな花にはよく「なんとかバイ」という名前が付けられます。たとえば、キンシバイ、ギョリュウバイなどがあります。このように、日本人は梅の花が大好きなのですね。



万葉植物園では、ミツマタのつぼみがふくらんできました。ミツマタはジンチョウゲ科の植物で、名前のおり枝が3つに分かれることをくり返しながら成長します。まだ花が少ない早春に清楚な黄色い花を咲かせます。ミツマタの樹皮からは上質な和紙ができて、紙幣の原料になっていることはよく知られています。万葉集の時代には「さきくさ」とよばれていました。万葉集にはこんな別れの歌があります。

春されば まづ三枝の 幸くあらば 後にも逢はむ な恋そ我妹

(はるされば まずさきくさの さきくあらば のちにもあわむ なこいそわぎも)

春になると真っ先に咲くミツマタのように、後にも逢えるのだから、そんなに恋しがらないでおくれ、私の妻よ。というような意味です。

まだ花は少ないですが、散歩しながら、冬の花を探してみてください。 松下

風土記の丘の花だより²²

今、そしてこれから見られる植物(1月18日)

1月もあと10日ほどになりました。この前、正月だったと思うのに、早いものですね。



ウメの花が咲き始めました。万葉植物園ではもう少しかかりそうですが、梅園では紅梅が咲き始め、白梅もちらほら咲いています。

ウメはバラ科の木です。古くから人々に愛され、多くの品種があります。梅園の白梅はがくが緑色で、万葉植物園のものと品種が違う事が分かります。



万葉植物園の入り口を過ぎた左側に、薄黄色のシキミの花が咲いています。シキミは漢字では楳と書きます。葬式に使うイメージが強く、よく知られていますが、実際に生えているシキミはあまり馴染みがないのではないのでしょうか。花は普通3月下旬ごろが見頃と思いますが、このシキミはちょっと慌て者ですね。花はきれいですが、実

には猛毒があります。

「落ちない葉」とか「落ちない木」と言われる木をご存じですか？先日テレビでも紹介されていましたが、クスノキ科のヤマコウバシという木です。

ヤマコウバシは冬になっても枯れた葉をつけたままです。春まで落ちることがありません。それで受験のお守りに用いられるそうで、今、静かなブームになっているみたいです。「落ちない=合格する」ということだそうですが、どうなのでしょう。まあ「溺れる者は何とやら」で、折しも受験シーズン、効き目を試してみるのもいいかもしれませんね。でも、いうまでもなく、本人の努力が一番ではないのでしょうか。もし、受験生が回りに居られたら、一枚いかがですか？でも枝は折らないでくださいね。



松下

風土記の丘の花だより²³

今、そしてこれから見られる植物(1月25日)

さて、今回も3種類の植物について紹介します。



春の訪れを告げる「ふきのとう」はフキというキク科植物の花のつぼみの集まりのことです。フキはよく食べられますが、ふつう食べるのは葉の茎で「葉柄・ようへい」と呼ばれる部分です。売っているものは太く長くおいしく品種改良されたものです。これは旧小早川家住宅の庭で撮ったふきのとうですが、散歩道の脇でも見つかりやすい。雄花と雌花がありますが咲いてみないとわかりません。写真のようにつぼみが包まれた状態の頃が食べ頃です。とうが立ってしまったら食べられません。



テンダイウヤク、あまり聞き慣れない木の名前ですね。クスノキ科の木です。不老長寿の木と言えば思い浮かべる方がおられるかも知れませんね。その昔、中国が秦(しん)と言われていた頃、始皇帝が不老長寿の薬を探してこいと徐福という人に命じました。徐福はあちらこちら探し歩き、たどり着いたのが熊野。そこでこの木を探し当てたという伝説です。でも、テンダイウヤクが日本に伝わったのは江戸時代、どうやらこの話は後世の作り話のようです。修復古墳の下にたくさん植えられています。



セリは「競り合う・せりあう」ように新芽を伸ばす事から名付けられたといわれています。もちろんセリ科の植物で、まだ寒い頃から水辺に群生します。春の七草の一番目に数えられています。万葉植物園では向かって左側の小さな池に植えられています。今は日常的には余り食べませんが、昔はよく食べられたらしく、万葉集には芹を摘む歌がいくつか残っています。

あかねさす 屋は田賜(たた)びて めばたまの 夜の暇(いとま)に 採(つ)める芹(せり) これ

屋は役所の仕事をがんばって、夜にせつせと摘んだセリがこれだぞ というような意味ですね。 (次回更新は2月5日水曜日の予定です) 松下

風土記の丘の花だより²⁴

今、そしてこれから見られる植物(2月5日)

立春が過ぎ、暦の上では春になりました。植物は正直なもので、シュンランのつぼみが上がってきたり、サンシュユのつぼみが少しほころび始めたりしてきました。



目立たない花ですが、ヤマアイの花が咲き始めました。柳川家の南側の山裾にヤマアイの群落があります。虫眼鏡で見るとなかなか面白い花ですよ。名前に「アイ・藍」と付きますが、ヤマアイはドウダイグサ科で藍染めに使うアイはダデ科なので、全く別の植物です。昔は染め物に使われていたそうです。



二枚目の写真はキジカクシ科のジャノヒゲの実です。青というか、紺というか、藍というか、いずれにしてもとてもきれいです。ジャノヒゲは感じで書くと「蛇の鬚」ですが、ヘビには鬚はありませんね。ジャノヒゲの別名がリュウノヒゲ(龍の鬚)なので、それで納得いきますね。葉が細長いので、それを龍の長い鬚に見立てたのでしょう。同じような所に生えるヤブランは、花茎が長く直立し、実の色は青というより黒に近いです。一方ジャノヒゲの実はモヤモジャした葉に隠れるようになっています。



万葉植物園にも、旧小早川家住宅の南の石垣にもたくさん生えています。三枚目の写真は、ウコギ科のタラノキの冬芽です。天ぷらにして食べたらとっても美味な「たらめ」はこの先から出る新芽を摘み取ったものです。冬芽を観察するときは同時に「葉痕・ようこん」も観察してみてください。葉痕とは文字通り葉が落ちたあとのことです。タラノキの葉はご承知のように3回羽状複葉といって、細かく分かれた多くの葉が集まって一枚の大きな葉になっています。それを支える

葉柄も大きく、付け根は幹にぐるりと巻き付いています。葉が落ちるとその後がくつきり残るのです。刺に注意して観察してみてください。

次回更新は2月12日(水)の予定です。

松下

風土記の丘の花だより²⁵

今、そしてこれから見られる植物(2月12日)

寒くなったり、暖くなったり、草花もいつ芽を出そうか、いつ花を咲かせようかと迷っているかもしれませんね。その中で「もう少し待ってね」と言ったり、「もう咲いたよ」と言ったりしていそうな花を3つ紹介します。



上の写真、バラ科のカンヒザクラのつぼみが少しずつ膨らんできています。暖かい日が続けば、あと数日か一週間ほどで開花しそうです。「あれ？ヒカンザクラじゃないの？」とお思いの方もいらっしゃると思います。ヒカンザクラ「緋寒桜」とヒガンザクラ「彼岸桜」は名前の響きがよく似ているので、混同しないようにカンヒザクラと呼ぶことが多いように思います。「寒い時期に咲く緋色の桜」という意味で「寒緋桜」ですから、どっちでもいいと思います。カンヒザクラは一般的なサクラと違って、花はパッと開きません。半開きのまま、緋色の花をうつむきがちに咲かせます。



中の写真、サンシュユも「もうちょっと待って」と言っているようです。ミズキ科のサンシュユは修復古墳の下に植えられています。他の公園などでたまに「サンシュ」とか「サンシュウ」と書かれた名札を見かけます。正しくは「サンシュユ」です。春に黄色い花が咲き、秋に真っ赤な実が実るので「春黄金・はるこがね」「秋珊瑚・あきさんご」などとも呼ばれます。



下の写真、アブラナ科のミチタネツケバナは、「お待たせしました」と言っているようです。種籾

を水に浸ける頃に咲くので「種浸け」だそうです。白くて小さな花ですが、よく見ると花びらが十字になっていて、アブラナ科の特徴がよく分かります。少し前までは口ゼットでしたが、花茎を伸ばして花を咲かせました。普段、余り気に留めない雑草に過ぎませんが、意識を変えるととても素敵な花に見えてきますよ。散歩しながら春の花を探してください。次回は2月19日更新予定です。

松下

風土記の丘の花だより²⁶

今、そしてこれから見られる植物(2月19日)



ナナホシテントウがもう越冬から覚めたようです。雪も降らないうちに今日は二十四節気の「雨水」です。春はそこまできているようです。前に紹介したサンシュユやカンヒザクラはもう花を開きました。ミツマタもつぼみの先が黄色くなってきました。ツツジ科のアゼビが咲き出しました。万葉植物園を過ぎて、道が左に曲がる辺りにたくさん植えられています。アゼビは漢字で

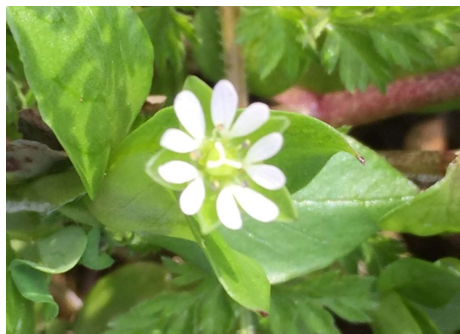


書くと「馬酔木」です。これを食べると、

馬が酔ったようにフラフラすることからこの字が充てられました。それはこの植物に含まれる毒性分のせいです。たわわに咲く花はきれいです。決して口にしないでください。



ツバキ科のヤブツバキが真っ赤な花を咲かせています。木偏に春と書くだけあって、この季節になると花は盛りを迎えます。ふつうはツバキと呼んでいます。ツバキは品種改良によってさまざまな品種があります。それに対してもともと野山に自生するツバキを特にヤブツバキといいます。メジロが花に頭を突っ込んで蜜を吸います。そうすることで、受粉を助けてもらっているのです。ナデシコ科のハコベの花です。こんなに拡大して見ると別の花のように思えますね。花びらは何枚あるでしょう。10枚? いいえ、5枚なのです。1枚の花びらが深く切れ込んだハート型なのです。それで10枚のように見えるのです。ハコベといっても何種類かあります。これはくきが少し紫色を帯びたコハコベです。全体が緑色のミドリハコベや、大きめで葉の縁が波打っているウシハコベな



どが、風土記の丘では見られます。ルーペ片手に観察してみてください。次回更新は2月27日の予定です。

松下

風土記の丘の花だより²⁷

今、そしてこれから見られる植物(2月27日)

一雨毎に暖くなる季節になりました。散歩道沿いには春を待ちきれない草花が咲き出しています。そんな花をいくつか紹介します。



シソ科のヒメオドリコソウです。もう一月ほど前から咲き始めています。葉は茎の上の方だけに重なって付き、上から見ると正方形に見えます。上の方は紫色を帯び、葉の間から咲くピンク色の花とで、一つの花のようにも見えます。群生することが多いのでとてもきれいです。名前が似ているオドリコソウオは、大人の腰辺りまである大型の草で、花は白やピンク色です。オオバコ科のオオイヌノフグリです。植物に詳しい方は「あれ？ゴマノハグサ科じゃないの？」とお思いかもしれません。最近、分類体系が変わりました。(古い知識しか持ち合わせていない私にとっては、混乱のほか何物でもありません。)在来イヌノフグリは風土記の丘ではまだ見ていません。薄紫色の小さな花で、葉が少し厚いです。



ジンチョウゲ科のジンチョウゲです。旧柳川家住宅や旧小早川住宅の庭で咲いています。ジンチョウゲには花びらがありません。白く見えるのは萼です。また、ジンチョウゲには実が成りませんが、それは日本で植えられているほとんどが雄株だからです。とてもいい香りがするので、一昔前はトイレの周りによく植えられていました。でも、そんな光景を覚えている人も段々少なくなってきたのでしょうか。



最後はスギの花です。見るだけで鼻がむずがゆくなる人もいることでしょう。でも、スギとて、人に迷惑をかけようとして花粉を飛ばしている訳ではありません。でもねえ……。気が向いたら観察してやってください。 松下

風土記の丘の花だより²⁸

今、そしてこれから見られる植物(3月8日)

花木園のハクモクレンのつぼみが今にも開きそうです。まもなく満開をむかえるでしょう。修復古墳の下のサンシュユは満開。道からでも黄色く見えます。万葉植物園のミツマタも楽しみです。風土記の丘ではたくさんの花が咲き始めました。



ヒサカキの花が咲いています。ヒサカキはこの辺りでは「びしゃこ」と呼ばれ、墓に供えられることが多い木です。雌雄異株（雌株と雄株がある）で、それぞれに雄花

（左）と雌花（右）が咲きます。花は3mmほどしかありませんが、中を覗くと、雄花にはおしべ、雌花にはめしべがあります。よお〜く観察して見てください。



アミガサユリお咲き出しました。旧小早川家住宅の庭や、万葉植物園でこれからが見頃です。この花は「バイモユリ」とも呼ばれます。花の内側に網目模様があるので、アミガサユリの方が覚えやすいかもしれませんね。バイモは漢字では「貝母」と書きます。球根の形が二枚貝のように見えることによるそうです。ヒメウズがこちらこちらで咲いています。あまりにも小さいので、つい見落としてしまうことでしょう。花は白くて少しうつむき加減に咲き、大きさは2、3mmしかありません。葉は深く切れ込み、茎はまっすぐ立ちます。写真は大きな株ですが、1本だけで咲いているものも少なくありません。この草はキンポウゲ科で、漢字では「姫烏頭」と書きます。烏頭はトリカブトのことで、それと同じ仲間でもとても小さいことから名付けられました。これから毎日のように春の花が咲き

始めます。サクラやタンポポのような目立つ花だけではなく、道端や足元にさりげなく咲いている小さな花にも目を向けてやってください。すると散歩が一層楽しくなることでしょう。

松下

風土記の丘の花だより²⁹

今、そしてこれから見られる植物(3月19日)

ウグイスの声をよく聞くようになりました。オオシマザクラも何輪か咲きました、シャガも早々と咲き出しました。春ですね。



ハクモクレンは花木園に大きな木が何本もあります。6枚の花びらが真っ白で、3枚の萼(がく)も真っ白で、全体がもちろん真っ白です。どれが花びらで、どれが萼か分かりませんね。よく観察すると、外側の萼の方が少し小さいです。近くのコブシはまだ咲きかけで、満開にはあと少しかかりそうです。でも梅林の南のシデコブシは今がまさに見頃です。



ヤマザクラが一週間ほど前から咲き始めました。ヤマザクラは開花と同時に葉が開きます。葉の色は茶色や緑など変異がありますが、それぞれに風情があります。ソメイヨシノはもう少しかかりそうです。それが散ったあとにカスミザクラが咲き始めます。八重咲きのサトザクラの仲間も咲き始めるので、これからずっといろいろなサクラを楽しむことができます。前山A23号墳の西側の山でエドヒガンも咲いています。



万葉植物園では、ヒトリシズカが咲き始めました。小さくて見過ごしてしまいそうですが、とても清楚な花です。名前もステキですね。あと少しすればフタリシズカも咲き出すことでしょう。まだ他にもたくさんの花がさいています。万葉植物園ではシナレンギョウの黄色い花、ヤブツバキの赤い花、ミツマタの薄き色の花などが見頃です。また、シュンランも咲き始めまし

た。赤紫色のムラサキケマンやニオイタチツボスミレなどのスミレの仲間も咲き出しましたね。まさに春です。

松下